

〔西宮記臨時三〕御庚申御遊

延喜十八年八月廿日、御庚申、中内藏寮調酒肴侍、又進碁手錢十三貫一貫御料、九貫女房、三貫男房、亥時侍臣提賭物參上、供天酒給侍臣等奏歌絃倭歌、

〔古今著聞集博奕十二〕承平七年正月十一日、右大臣家仲平藤原の饗に、中務卿宮おはしましたりけるに、中務卿と右大臣と圍碁のこと有けり、碁手は錢にてぞ有ける、むかしは斯様のはれの儀にも懸物にいでけるにこそ、近代にはたがひてこそ侍りけれ、

〔日本紀略四六〕貞元元年二月十五日壬子、太政大臣兼通藤原始遷桂芳坊内藏寮奉仕所々饗副進碁手三萬錢、即分給所々、

〔拾遺和歌集九〕内侍馬が家に、右大將實資がわらはに侍ける時、ごうちにまかりたりければ、ものか、ぬさうしを、かけ物にして侍けるを見侍て、  
小野宮太政大臣實賴藤原

いつしかとあけてみればはま千鳥跡あるごとにあとのなき哉  
返し

と、めても何にかはせんはまちどりふりぬる跡は浪にきえつ、

〔新勅撰和歌集七〕圓融院御時、中將公任と碁つかうまつりて、まけわざに、まろがねのこに虫いれて、弘徽殿に奉らせ侍ける、  
小野宮右大臣實資藤原

萬世の秋をまちつ、なきわたれ岩ほに根ざす松むしのこゑ

〔源氏物語四十九〕けふのしれつねよりことにのどかなるを、あそびなどすさまじきかたにていとつれづれなるを、いたづらに日ををくる、たはふれにてもこれなんよかるべきとて、碁ばんめしいで、御碁のかたきにめしよす、いつもかやうに、けちかくならしまつはし給にならひにたれば、さにこそはと思ふに、よきのり物はありぬべけれど、かるくしくはえわたすまじきを、